

## はじめに

昭和四十五（一九七〇）年四月からスタートした、私の島根大学教育学部での大学教官としての四十年間の仕事に、平成二十三（二〇一一）年三月末をもって終止符を打つこととなりました。この節目に、これまでの四十年間の大学人としての人生を振り返り、ここに本書を著すことにいたしました。

時折しも、世界は、日本は大きな変革、変動、不安、混迷の時代を迎え、さらに地球環境悪化を防止するための、全世界的規模で多くの多難な問題を解決しなければならぬ大変な時代に突入しています。

私は昭和二十年山紫水明の地、岐阜市で生まれ、高校までの十八年間を送りました。岐阜市のシンボル金華山山頂から清流・長良川、名峰・伊吹山、美しく広大な濃尾平野を眺めては、将来への夢を描いたものでした。そして郷里を離れ、上京して東京教育大学（現在の筑波大学）に入学したのは、昭和三十九（一九六四）年東京オリンピックの年でした。この時代、日本は戦後に終止符を打ち、高度経済成長期に入り、国民は希望と夢に満ちていた時代でもありました。

私が大学で専攻したのは農学部(現在は、生命、生物資源などの用語を使った学部名称変更されたところもあります)における木材工学でした。当時はポリバケツに代表されるように、木材製品がプラスチックに取って代わられる「材料革命の時代」であり、さらには、暖房や各種熱源の燃料が木材・木炭・練炭などから灯油・ガスへの「燃料革命の時代」でもありました。このような華やかな工業化の高度経済成長期に、斜陽産業の素材とも思われる自然材料である「木材」を研究対象とする分野を専攻してしまいました。私にとっては工業化と逆行する分野を進路として選択してしまい、「後悔と失望」の時でもありました。しかし、石油化学コンビナートなどの国内の先進的な工業地帯では、徐々に人々をむしばむ「公害問題」が発生し始めた時代でもありました。でもその頃は、地球と人類をむしばむ「地球温暖化」はまだまだ顕在化してきていませんでした。

昭和三十九(一九六四)年から約五十年経った今日、地球温暖化防止、持続可能循環型社会の形成、低炭素社会の形成のため、森林や再生可能で省エネ材料である木材が、将来の人類と地球を守るために、今日ほど必要になるとは誰が予想したでしょうか。

五十年前、私の大学青春時代の進路選択での「後悔と失望」は、今になってやっと消え去りました。あきらめずに半世紀間継続して、木材や木工、木工具を研究し、木材加工教育に専念し、多くの学生、社会人に対して指導してきたことに、私自身大いなる誇りが持てるようになりました。木材・木工と出会ったことに感謝できるようにもなりました。

また、私の島根大学教育学部(教員養成学部)での大学人としての四十年の間には、幾多の学部・

大学の改革がありました。大学の生涯学習社会への対応、教員養成学部・大学における大学院(修士課程)設置、少子化にともなう教員養成学部・大学の学生定員削減、国立大学法人化、教員養成制度見直し、教員免許更新制度などです。このような変化、変革の激動の渦の中で、よくぞ自分を見失うこともなく、信念を持って、愚直一途に邁進できたことか。我ながら驚きと皆さまに感謝をせずにはいられません。

私は、島根大学在職四十年の間に多くの貴重な人生経験をさせていただきました。赴任早々の島根総合高等職業訓練校木工科での一年間の木工修行は、私の研究者、教育者としての人生を大きく方向付けしてくれました。そして今では、のこぎりで軽やかに木材を切り、かんなを繊細に巧みに使いこなす「かんな博士」の大学教授になってしまいました。こんな風変わりな大学の棟梁のような教授はもう出現しないのでしょうか。ぜひ、後継者が出てきてほしいと、私は願っています。

昭和四十五年島根大学に赴任当初、教育学部中学校教員養成課程技術・職業科という研究室に所属する学生達の指導が始まりました。以来、私は四十年間多くの純朴で、まじめな良き学生に恵まれました。彼らは木材加工を卒業研究で行う希望者で、三回生後期から山下研究室に配属になってきました。彼らとは、私の木工具の「かんな」の研究を一緒に進めてきました。また、学生と学園祭で駅伝を走ったり、学内研究室対抗ソフトボール大会や研究室ハイキングでも一緒に楽しんでくことは、今でも学生と共に過ごした楽しい思い出です。

昭和五十(一九七〇)年頃からの、島根大学の生涯学習社会への対応では、島根大学農学部(現在

の、生物資源科学部)の先生方と開始した鳥根大学公開講座「木工教室」でした。私が三十歳頃から、この「木工教室」を企画し、松江市民の皆様との木工ものづくり学習を通しての社会教育活動を開始しました。この松江市での活動を継続しながら、出雲科学館での出雲市民の皆様にも広がっていったことは、私にとりましては象牙の塔にこもらず、広く社会に出て視野を広め、社会性を身につける上にも意義ある経験でした。そして、それぞれの学習者の皆さんが木工同好会を組織するところまで発展してきたことは、まさに生涯学習社会が形成されることになり、大変嬉しく思っています。

ところで、教員養成学部は自然科学、社会科学、人文科学、スポーツ科学、芸術、科学技術分野など総合大学のような広範囲の学問領域の大学教授を擁しています。このような中で、私は縦横無尽にいろいろな専門の先生方と交流をさせていただき、見聞を深め、視野を広げることもできませんでした。さらには、酒を酌み交わしながらの大議論もさせていただき、異分野の先生方とも友情を深めることもできました。このような中で、私のかんなの研究も大きな広がりとなり、思いもよらなかった身体木工作業動作解析にまで広がっていきました。いわゆる、スポーツ科学の応用分野であり、スポーツ・体育研究室の先生方に測定機材の協力や、研究手法の指導を得ることができました。このような研究発表は、私の専門の木材、木工関連学会では珍しく、希有な注目を浴びながら、中国・留学生の陳廣元君に農学博士の学位まで指導することができました。

そして、最近では農林水産省林野庁の国産材の教育的利用による、豊かな森づくり活動の国民運

動「木育」事業に参画することにまで活動は拡大していきました。これは見方によれば、広義の教育学、教育情報学、教育社会学の分野の活動であり、教員養成学部には籍を置く私たち研究者にとつては、新たな研究、教育活動と考えることができます。教員養成学部には新たな研究、教育分野の可能性が多々存在すると見ることができます。このように常に、私は教員養成学部に新たな夢を持ち、四十年間を研究、教育活動で過ごしてきました。

島根大学という小さな一地方大学で、四十年間夢と希望を持って、着実に大地に根を下ろし、どんな欲に地域の空気を吸い、地域の水を飲みながら地域を大いに活用し、大学の仲間や、多くの地域住民の方々と深く交流をさせていただいたことが今日の私を築き上げてくれました。

この私の四十年間の大学人としての経験を中心にした記事を、産業教育研究連盟の編集で、農山漁村文化協会発行の月刊誌「技術教室」の「木工の文化誌」欄に、平成二十二年（二〇〇八）年九月号から平成二十二年（二〇一〇）年八月号までの二年間連載させていただくことができました。この二年間の連載記事を書かせていただいたことが、私の大学人としての人生を振り返る良いきっかけとなりました。そしてまた、本書出版のきっかけともなりました。この拙著から私の島根大学教員養成学部の大学人としての人生観を、少しでもくみ取っていただければ幸いです。

山下晃功

平成二十二年 十二月二十三日

このプレビューでは表示されないページがあります。

大学の棟梁——木工から木育への道——目次

はじめに..... 1

1 私と木工の宿命.....	11
2 大学での木材・木工教育.....	18
3 大学教官としてスタート.....	24
4 かなな削りの研究開始へ.....	30
5 学会でかなな削りの研究発表.....	37
6 髪の毛とかなな台の刃口距離.....	43
7 中空を舞う削り華.....	49
8 唐木削りの立刃 <small>たちば</small> かなな.....	55
9 私の研究は道具「かなな」.....	61
10 いよいよ博士論文完成へ.....	68
11 木工作業動作研究(1) かなな削りの指導法.....	75
12 木工作業動作研究(2) のこぎりびき・きりもみ・くぎ打ちの指導法.....	83
13 研究成果の社会還元に向けて.....	89
14 島根大学公開講座「木工教室」.....	97
15 公開講座「木工教室」の継続学習への発展.....	103
16 中高生の全国木工スキルコンテスト.....	109



17	全国中学生ものづくり競技大会のスタート	115
18	全国中学生ものづくり競技大会の変遷	121
19	カルホーン先生との交流	128
20	カルホーン先生との友情二十三年	134
21	技術科教員養成の反省と期待	140
22	将来の技術教育の夢に向かって	147
23	熱くなれ!!「木育」	154
24	木と木工の復権	161
25	NHK・BS hi「アインシュタインの眼」放映	167
26	中学校・技術科教師をめざす大学生、木工実習で生き活き	172
27	超人気授業「くらしの中の製作技術」	179
28	我こそは、本物の教員養成学部の教授なり!!	186
	おわりに	193

# 1 私と木工の宿命

## ● 子ども時代の木と木工の出会い

昭和二十(一九四五)年木の国・岐阜生まれの私にとっては、木や木工との関わりは日常茶飯事でした。身の回りにおける生活用具の大半は木材でできていました。また、木登り、チャンバラの木剣、木の工作遊び(飛行機や船の模型づくり、犬小屋、鶏小屋づくり、雪遊びのそりづくり)など遊びの中にも随所に木材がありました。身の回りにはある材料としては、木しかなかったとも言えます。

さらに、私は風呂炊きの手伝いをよくさせられました。燃料はもちろん薪でした。現代のようなガスや電気ではありません。当時、風呂炊きは子どもの手伝い仕事であったと思います。とくに我が家は商売をしていたために、父や母は忙しく、私に風呂炊きのお鉢がよく回ってきました。私にとつては、冬場の風呂炊きはむしろ楽しいことでした。なぜならば、暖を取ることができからです。しもやけ(凍傷)で毎冬苦しめられていた私にとつては、しもやけ予防のためにも喜んで風呂炊きをしていました。風呂炊きを通して、ゆらゆらと燃える炎を観察することは、木材燃焼の科学実験を楽しんでいるようでもありました。揺らぐ炎をジッと見ていると、暖かい炎の中の別世界へ

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 2 大学での木材・木工教育

### ● 私の悩み「木材工学」とは？

大学の木材工学専攻では木材組織学、木材加工学、木材材料学、改良木材学、木材切削論、木材乾燥論、木材接着論など木材・木工に関する基礎的な学問とその周辺学問を中心にカリキュラムが構成されていました。それなりに木材の基礎となる木材科学に興味を持ちながら楽しく学習できました。しかし、現実社会で木材が使用されている木造建築、木製家具などの産業、生活に直結した応用学問は昭和三十九年から四十五年の私が東京教育大学及び大学院に在学中の六年間にはなかったように記憶しています。

木材工学自体が従来の林学から新たに派生し、独立した学問領域であるために、まだそこまで進んでいかなかったからでしょう。そして、木材をもつくり素材産業の一つの素材として位置づけられていたように思います。これは農学部にある学問分野としては致し方ないことかもしれないかもしれません。そして、ここには目に見える派手さはありませんし、見栄えがせず、地味なものに思えて仕方がありませんでした。このような学問「木材工学」を学んでも木造建築、木製家具などを自分の

このプレビューでは表示されないページがあります。

### 3 大学教官としてスタート

#### ● 松江に向けての旅立ちと、待っていた多くの授業

五月の連休明けの赴任でした。名古屋始発、出雲大社のある大社行きの特急「大社」号での赴任の旅は丸一日掛かりでした。夕方、松江駅に着いたときには、蒸気機関車の煙ですすけた、薄暗い寂しい駅舎が私を迎えてくれました。

そして、昭和四十五（一九七〇）年四月二十五日付けの「人事異動通知書 文部教官教育職（一）四等級採用四号俸を給する」の辞令をいただき、教育学部技術・職業科でいよいよ給料をもらっての大学教官の生活がスタートしました。当時、島根大学は学園紛争の最中で、助手も授業ができるようになり、私は前任者の木材加工に関するすべての授業を行なうことになりました。木材加工総説、木材加工実習Ⅰ、木材加工実習Ⅱ、木材加工実習Ⅲ、塗装演習、木材加工演習Ⅰ、木材加工演習Ⅱでした。その他に、家庭科の家庭工作、美術の木工実習、理科の理科工作の一部など、おおよそ教育学部での木材加工関連の授業はすべて担当しなければならぬ状況でした。当時は学科目「電気」には二名の教官と一名の技官、「機械」には三名の教官、「農業」には二名の教官と三名の農

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 4 かなな削りの研究開始へ

### ● 劣悪な研究環境からのスタート

島根大学に赴任する前に、恩師である林大九郎先生からは、農学部から教育学部へ就職したのだから、教育学部らしい研究をしなさいと言われていました。このような恩師のアドバイスもあり、新天地での研究テーマは教育学部らしいテーマに絞らねばと考えていました。とはいっても修士論文の研究テーマは木材切削であり、工学的手法を習得してきた私にとっては、教育学をベースにした文系の研究などできるはずがありません。しかし、木工具のかななは、中学校の技術教育では必修の教材であり、この木材切削のメカニズムを解明することは教育科学分野として十分に意義あるものと考えていました。

そして、私の前任者は美術の出身の方で、おおよそ工学とは無縁な方でした。科学的な研究に必要なデータを得るための測定器具は、一切ありませんでした。しかし、木工実習に必要な木工具、木工機械や工作台は木材加工実習室には、かなり充実していました。私は博士号を持たないで島根大学に赴任してきましたので、いち早く研究できる体制づくりが必要でした。島根総合高等職



このプレビューでは表示されないページがあります。

## 5 学会でかな削りの研究発表

### ● 日本木材学会での初めての研究発表

日本木材学会は、日本における木材科学を主体にした最大の木材総合学会(学会員数は約二千数百名)です。私達、全国の農学部において木材科学を専攻した者の大多数が入会し、学術研究発表の場としている学会です。さらには、全国にある林業試験場、木材試験場などの林業、木材に関する公設試験研究機関の研究員や民間木材企業の研究者らも会員となって構成されていました。しかし、当時は教育学部教官の会員数は極めて少数でした。

私は農学部在学中からこの学会へは入会はしていましたが、学会の全国大会で一度も研究発表の経験もなく、ただ単に月刊で発行されていた木材学会誌を購読していただけでした。しかし、大学教官となった今では、将来の「かな削り博士」を目指して研究発表をしなければ研究論文を作成することはできません。したがって、投稿論文が審査される権威ある学会誌へ投稿するためには、学会の研究発表は欠くことはできませんでした。

昭和四十七(一九七二年)に初めて日本木材学会全国大会(東京農業大学)において、「手鉋におけ

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 6 髪毛カミゲとかんな台の刃口距離

### ● 一枚刃かんなの研究から

現在では、裏金を使用した二枚刃かんなを使用することが一般的となっており、裏金のない状態では、裏金を使用することは想像が付きません。しかし、木材切削論からすれば、裏金を使用しない一枚刃かんなによる平削りは基本中の基本で、平削りの木材切削論を体系的にまとめるためには、一枚刃かんなによる木材切削論から開始しなければならぬことは自明の理です。

ご承知のように、二枚刃かんなの裏金は逆目ぼれの発生を防止するためのものであり、裏金の刃先角は鋭利な角度(五〇〜六〇度)ではありません。この裏金が発明される以前にはどのような一枚刃かんなで逆目ぼれの発生防止を行ってきたのか、誰しもが素直な疑問を持つことでしょう。こんな初歩的な疑問から、さまざまな探求心が目覚め、各種の文献調査に熱がこもってきました。しかし、最も頼りとなり、職業訓練校が教科書として使用している雇用促進事業団発行の木工技能に関する教科書には、一枚刃かんなの切削条件は記載されていません。刃口部分の名称として、刃口、木片返し(木端返し)、切削角の名称は述べられておりますが、数値は全く記載されてい

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 7 中空を舞う削り華

### ● かんなくずが削り華

一枚刃かんなどで木を削ったときの切削抵抗、削った後の切削面性状を測定評価することは切削加工の基本でした。そして、回転削り、鋸断、単板切削などの木材切削研究の常道でもありました。

しかし、日本のかんな削りにおいては、何と言っても多くの人たちを魅了するのは、薄くて長く、帯状に伸びた連続的なかんなくずがかんな台のくず出し口から、フワフワと中空に舞いながら出てくる様でした。魔術のような日本のかんな削りです。とくに、外国人にとっては日本の大工道具の技術美を見たように、歓声とどよめき起きるのは必至です。

このような世界に誇るべき、見事な日本のかんななくずがどのように形成され、排出されてくるのかを、どうして木材科学者は研究対象にしてこなかったのか。日本の木材並びに木材加工の研究者は、このように世界に誇るべき木工技術を研究対象として、日本独自の木工文化のすばらしさを研究し、世界に誇ろうとしなかったのか。私はそれが不思議でなりません。

私はこのような日本のかんな削りの技術美を、島根総合高等職業訓練校での研修で、偶然にも見

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 12 木工作業動作研究(2) のこぎりびき・きりもみ・くぎ打ちの指導法

### ● 日本のおこぎり

木工作業における中学校技術・家庭科技術分野で学習する基本動作はかなな削り、のこぎりびき、きりもみ、くぎ打ちの四種類です。前項ではかなな削りの木工作業熟練者のうまい「つぼ」を述べてきました。このように、身体動作を科学的に分析し、その木工作業技術の無駄のない、合理的で、正確で、効率的な重要なポイント(つぼ)を説明しなければ、木工具の使う身体動作の科学的な指導法は確立しません。

次にこのこぎりびきのつぼを簡単に述べてみることにします。詳細は木材学会誌(Vol. 49, No. 3, 2003)をご覧ください。のこぎりびき作業の構えは「半身」で、左右の目の中間となる肩間みけんは、のこ身の真上後方に位置しており、のこ身の左右両側を見ることができるよう構築しています。そして、材面に対してのこ身は正確に直角を保ちながら、ひき動作は力強く、返し動作が軽快にリズムカルに行われていました。

ひき始めにおいては「のこ身の元の方を使うように小刻みなひき動作」、切り中では「右肘の円滑



このプレビューでは表示されないページがあります。

## 15 公開講座「木工教室」の継続学習への発展

### ● 仲間と楽しむ、木工継続学習へと発展

昭和五十五（一九八〇）年に第一回島根大学公開講座「木工教室」を開講しました。次の年の二月に受講生の皆さんからぜひこのような講座を継続して欲しい、そして、せっかく九月から十二月の四カ月間の長期間、皆さんとともに苦楽をともに学習してきた仲間と木工を通して交流を継続したいとの声が上がりました。主宰者である私としては、この上ない喜びでした。そして、第一期受講生の皆さんによる島根大学公開講座「木工教室」OB・OG会（後の島根大学松江木工クラブ）が結成されました。

昭和五十五年に続き、同五十六年も島根大学主催の公開講座「木工教室」を開講することを約束して、第二回も是非皆さんに受講していただくことをお願いしました。このOB・OG会の結成は、受講生を連続して募集できるメリットがありました。主催者が苦勞する、受講生を定員一杯埋める苦勞も軽減できて一石二鳥でした。でも、公開講座は年間を通しての開講ではなく、一年の内三〜四カ月の間しか開講できませんでした。会員の皆さんにとっては年間を通して、木工を会員の

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 19 カルホーン先生との交流

### ● ペン・フレンドからのスタート

私の国際交流歴は比較的遅くから始まりました。学位も取得し、研究も一段落した昭和六十二（一九八七）年ごろからであったように記憶しています。それまでは私は国際学会にも出席したことなく国内の学会一筋に研究発表を行ってきました。しかし、年齢的にも四十歳を過ぎ、国際交流をするにはすでに遅い年齢に達してきました。でも、身分は助教でもあり絶望的な年齢ではありません。

ちようどこの頃、島根大学は国際交流を促進する動きが始まり、海外に多くの姉妹校の協定を結ぶ動きが活発化してきました。アメリカではワシントン州エレンズバーグにある州立のセントラル・ワシントン大学（CWU）と、ケント州立大学の二校と姉妹校の協定を結んでいました。私の専門である木材加工がこのアメリカの二校にあるかどうか興味をもって、大学ガイドブックで調べましたところ、幸いにも両校にその専門があり、専任の教授が在籍していることが分かりました。ちようどその頃、島根大学教育学部の英語教育研究室の山田政美先生がCWUに長期研修でお

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 23 熱くなれ!! 「木育」

### ● 「木育」と地球環境

「木育」に類似した用語に「食育」があります。平成十七年六月十日に食育基本法が成立したことにより、大きな国民運動として展開されています。日本国民全般の食生活の乱れをただし、健全な食生活を取り戻そうとする大きな国民運動になります。そして、中学校技術・家庭科の家庭分野においても「食育」が記載されるようになります。

木育については、平成十八年九月八日、森林・林業基本計画が閣議決定されました。この基本計画の中で国民・消費者、生活者の視点を重視することが施策に盛り込まれ、林産物の供給及び利用の確保に関する施策の一つに「木材利用に関する教育活動(木育)の促進」が明記されました。これが国レベルで登場した最初の「木育」でした。

この木育は技術教育振興の大きく、新たな視点となりうる重要な教育用語であることを多くの技術教育担当者に理解していただきたいと思えます。七月七日より「G8洞爺湖サミット」が開催されました。その中心議題が地球環境です。これからの普通教育、職業教育のいずれの技術教育でも

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 26 中学校・技術科教師をめざす大学生、木工実習で生き活き

### ● 中学校・技術科教員養成のための木工授業

私の中学校技術科教員養成に関する木工実習授業題目は次のようでした。木材加工総説、木材加工実習Ⅰ、実習Ⅱ、実習Ⅲ、木工演習Ⅰ、演習Ⅱ、塗装演習、特殊木工演習でした。木材加工総説は木材組織、木材の物理的性質・機械的性質、木材切削加工論などの講義です。

木材加工実習Ⅰは、かなな台の調整、かなな身・裏金の研磨調整と手加工(さしがね、スコヤ、両刃・胴付き・あぜびきのこぎり、かなな、追入のみ、げんのうの使用法)による板材加工(打ち付け接ぎ、大入れ接ぎ、組み接ぎ、包み打ち付け接ぎなどの接ぎ手加工を含む)による箱物製作の基本工作法の習得を目標としました。

木材加工実習Ⅱは、角材による機械加工による脚物家具のあしもの基本工作法の習得を目標としました。具体的には、帯のこ盤、丸のこ盤、手押しかなな盤、自動一面かなな盤、角のみ盤、ほぞ取り盤などの基本的な木工機械の安全で正確な使用法の習得などです。

木材加工実習Ⅲは実習Ⅰ、Ⅱを複合して、板材、角材、フラッシュ構造かまよパネル、框組構造かまよパネル



このプレビューでは表示されないページがあります。

## おわりに

私が出演するNHK・BS hiの番組「アインシュタインの眼」が平成十九（二〇〇七）年六月十九日午後十時から十時四十分全国放送されました。番組のタイトルは「宮大工 木を活かすカナの技」でした。

ちょうどこの年の四月から、島根大学教育学部附属中学校で長年技術科教諭として教鞭を執っていました長澤郁夫先生が、島根大学教育学部と島根県教育委員会との交流人事によって、島根大学教育学部教育支援センター准教授として着任して来てくれました。彼は幸いなことに、私の研究室の卒業生でした。長澤先生は技術・家庭科の技術分野の教材開発とコンピュータ教育に熱心で、数多くの教材教具を開発していました。そして、教育雑誌にこれらに関する論文や記事を数多く執筆していました。

長澤先生が私のこのNHKの取材、収録の手伝いを積極的に行ってくれました。このお陰で無事収録、放映までこぎ着けることができたと言っても過言ではありませんでした。このNHKでの放映を、彼は教育雑誌関連の知り合いに大いに宣伝をしてくれる中で、現在の産業教育研究連盟代表

の大東文化大学教授の沼口 博氏や同大学教授で同連盟編集委員の三浦基弘氏らに、私のNHK出演番組の情報を伝えたようでした。ここから技術教育の月刊教育雑誌である「技術教室」への二年間の連載が始まりました。

最初は毎月たったの四ページの記事「木工の文化誌」ですので、喜んで簡単に引き受けました。ただし、二年間の連載と言うことで、二年間の二十四回も記事が書けるかどうか多少の不安がありました。回を追うごとに一カ月がアツという間に来てしまい、毎月毎月原稿に追われるようになってきました。人気作家が原稿に追われ、書齋まで出版社の職員が原稿を取りに押しかける話を、テレビなどでよく見ますが、そんな気持ちを多少なりとも味わうことができ、完結した現在は本当に気が楽になりました。

しかし、この連載によって、定年退職を間近に控えていました私にとりましては、私の大学人としての人生の仕事を振り返るための絶好のチャンスを与えられ、今となっては心より感謝していません。

連載を始めた二〇〇七年は、ちょうど農林水産省林野庁の木育事業に予算が付き、木育推進体制整備総合委員会が発足し、私が座長に任命されて本格的に木育(木材利用に関する教育活動)が活動をはじめた時期でもありました。国民運動の木育は、地球温暖化防止のために、CO<sub>2</sub>を吸収させ豊かな日本の森林を育むことを目的としています。とくに人工林の国産材を積極的に教育面で使用し、日本の森林を育むために国産木材を使う対策、方法、啓発、広報などを行うための事業企画、

教材作成、フォーラム実施などを全国的に行わねばなりません。

教員養成学部の教授として、学校教育のみならず社会教育にも早い時期から関わりそれなりの活動をしてきた私にとつては、国レベルの大きな社会貢献の場を与えていただいたことになります。一地方大学の教授には、めつたにこのようなチャンスは与えられません。新米の座長をご指導いただいたのは、当時林野庁木材利用課課長補佐の河野裕之さんでした。河野さんのお陰でいくつかの難題を乗り越えることができました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

この木育事業において、全国で野外活動、美術工芸活動、環境教育活動さらには民間での木工教室事業や木造建築工務店、木工品製作業界などに関わっておられる多くの方と交流ができました。この交流を通して私も大きく触発させられました。とくに、幼児教育での木の遊具、木のおもちゃと教育・保育に俄然興味が湧いてきました。

ちょうど、私も真太郎、凜子の二人の孫に恵まれ、この二人の孫とダブらせながら、木育に関する木のおもちゃ開発の仕事が、長野・塩尻の(株)酒井産業と協同開発として進展し始めました。木曾ヒノキでできたエコ・ロボットの「ロボ木」です。またこれを、島根大学教育学部附属幼稚園での長年の豊かな幼児教育実践経験を持つ、島根大学教育学部特任教授の野津道代氏がロボ木を使った、環境教育の幼児教育現場への普及に大きな力を貸していただきました。そして、彼女の力により、幼児教育現場向けの分かりやすいロボ木使用解説書も完成しました。

さらには、この幼児教育用の環境教育教材の「ロボ木」は韓国・全羅北道の全州にある国立全

北大学幼児教育研究者のイー・ヤンファン教授の目にとまり、韓国・国立育児政策研究所(KICE)での私の幼児教育特別講演へと発展していききました。

また、二〇一〇年には私が(社)日本木材加工技術協会中国支部長として、実行委員長を務め、全国初の第一回全国合板一枚作品コンペを企画し、無事に終了させることができました。この大事業の実施には、島根大学総合理工学部の吉延匡弘准教授、中井毅尚准教授、安高尚毅助教、教育学部の長澤郁夫准教授の四人の実行委員としての献身的な協力と尽力のお陰であります。四人の実行委員の皆さんにはこの場を借りて、心より御礼申し上げます。

以上述べてきましたように、木育事業、ロボ木教材開発、韓国・KICEでの講演、全国合板一枚作品コンペ……など、定年退職の時期が迫るにつれて、大きな仕事が続から次へと山のよう押し寄せてくる毎日でした。そして、ゆっくり私が定年退職の準備をする間のない多忙な日々の中で、このように、この定年退官記念の自叙伝的な拙著を著し、出版できることは、奇跡、幸運としか言いようがありません。このような多忙の日々も二〇一〇年の年末ともなれば残りわずかです。残すところ三カ月で定年退官です。

後は、卒業生の長澤郁夫君、原智君、後藤康太郎君、原知子さんらが発起人として、三月二十日に計画していただいています定年退官記念事業を元気に迎え、教え子である山下研究室の卒業生の皆さんや、日ごろ私と親しく親交のある皆様の手には、この本が渡るのを楽しみに、今日まで原稿を書いてきたキーボードをたたくことを、今終えます。最後に、本著の出版を快く引き受け、原

稿の校正やレイアウトなどでいろいろ貴重なアドバイスをいただいた、海青社の宮内 久代表に心より感謝します。

平成二十二年十二月二十三日

山下晃功

## 山下晃功 (やました あきのり)プロフィール

- 1945(昭和20)年 岐阜県岐阜市生まれ
- 1970(昭和45)年 東京教育大学(現筑波大学)大学院農学研究科修士課程 木材加工専攻修了
- 1970(昭和45)年 島根大学教育学部助手採用
- 1986(昭和61)年 かななの研究により農学博士(名古屋大学)取得
- 1990(平成2)年 島根大学教育学部教授
- 1996(平成8)年～2000(平成12)年 島根大学教育学部附属小学校校長
- 2001(平成13)年 第9回日本木材学会 地域学術振興賞受賞
- 2002(平成14)年 全国中学生ものづくり競技大会実行委員長(平成21年まで、現在は会長)
- 2007(平成19)年 農林水産省林野庁 木材産業の体制整備及び国産材の利用拡大に向けた基本方針作成委員会委員
- 2007(平成19)年～2009(平成21)年 林野庁 木育推進体制整備総合委員会座長
- 2010(平成22)年 日本産業技術教育学会 功績賞受賞  
第一回全国合板1枚作品コンペ実行委員長



### 著書：

- 1993(平成5)年 「木材の性質と加工」(編著)開隆堂出版
- 2001(平成13)年 「人間生き生き 木と森の総合学習」(編著)(社)全国林業改良普及協会
- 2005(平成17)年 「ものづくり木のおもしろ実験」(共著)海青社
- 2006(平成18)年 「森林を育む木の楽しみ 木工クラフトハンドブック」(共著)(社)全国木材組合連合会
- 2008(平成20)年 「木育のすすめ」(共著)海青社

### 主な社会活動など：

島根大学、出雲科学館創作工房において、各種木工教室の主宰者及び講師として、子どもから大人まで広範囲に木材の利用普及活動及び木工ものづくり学習の普及を行っている。軽妙なトークと楽しく、わかりやすい指導は全国的に有名となっている。林野庁の進める地球温暖化防止のための、「森づくり」における木育(木材利用に関する教育活動)のパイオニアであり、日本の第一人者です。

英文タイトル  
**Daigaku no Tōryō**  
by  
Akinori Yamashita

---

だいがくのとうりょう  
**大学の棟梁**  
—木工から木育への道—

---

発行日 ————— 2011年3月20日 初版第1刷  
定 価 ————— カバーに表示してあります  
著 者 ————— 山下 晃 功  
発 行 者 ————— 宮 内 久



**海青社**  
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4  
Tel. (077)577-2677 Fax. (077)577-2688  
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>  
郵便振替 01090-1-17991

---

● Copyright © 2011 A. Yamashita ● ISBN978-4-86099-269-9 C0037  
● 乱丁落丁はお取り替えいたします ● Printed in JAPAN